

し予藤兵衛に逢し時餌は何なる哉と尋たれば鼠の油揚なりといへり然るや佐倉の儒臣窪田某狐藤兵衛の傳あり云城之東墨村有獵者名藤兵衛善捕狐人呼曰稻荷屋稻荷司穀神也或謂神即狐也或謂狐神所使故謂狐亦曰稻荷以藤兵衛捕狐又轉曰稻荷屋云略下

〔北越雪譜 初編 中〕狐を捕る

我が里魚沼郡にて狐を捕る術さまあるなかに手を懐にして捕る術ありその術いかんとなれば春陽の頃はつもりし雪も晝の内は軟なるゆゑ夜なく狐の徘徊する所へ麥など春杵を雪中へさし入て二ツも三ツもきねだけの穴を作りおけば夜に入りて此穴も凍りて岩の穴のやうになるなりさてかれが好く油滾あぶらなどをちらしおきかの穴にも入れおくさて夜ふけ人静りたるころ狐こゝにきたりちらしおきたるを喰ひ盡し猶たらざればかならずかの穴にあるをくらはんとし身を去りめ倒になりて穴に入りいれおきたるものをくらし出すに尾のすこしいづる程に作りまうけたる穴なれば再びいづる事叶はず雪は深夜に去たがひてますますこほりかれがちからには穴をやぶる事もならずいでんくとして終には性を勞らす捕へんとはかりしものこれを見て水をくみきたりてあなに入るこほりたる雪の穴なればはやくは水も漏す狐は尾を振はして水にくるしむ人は邊りにありてかれ將に死せんとする時かならず尻をひるを避る狐尾を搖さるを見て溺死たるを知り尾を探り大根を抜がごとくして狐を得る穴二ツも三ツも作りおくゆゑをりよき時は二疋も三疋も狐を引抜事あり是は凍りて岩のやうなる雪の穴なればなり土の穴はかれが得ものなれば自在をなして逃さるべしされば雪國にかぎる事なれば雪のついでに去るせり

狐事蹟

〔日本書紀二十六〕五年是歲命出雲國造名修嚴神之宮狐嚙斷於友郡役丁所執葛末而去  
〔續日本紀三十二〕寶龜三年六月己巳有野狐踞于大安寺講堂之藁